

## 科) 図6

茎葉の外形がマツモ特有であることと、過去の記録に小堅果に3個の小刺を有する文献(藤山他、1982)があるので、マツモであると考えられる。

3. センニンモ *Potamogeton maackianus* A. Benn. (ヒルムシロ科) 図7

花部はないが、茎葉の外形ならびに大きさがセンニンモ特有であるところから、センニンモであると考えられる。

4. ヒロハノエビモ *P. perfoliatus* L. (ヒルムシロ科) 図8

葉の基部が広心臓形で、茎を深く抱く特長がある化石も発見されているので、ヒロハノエビモであると考えられる。

5. *Potamogeton* sp. (ヒルムシロ科) 図9

ササエビモ *P. nipponicus* Makino のようにも見える。

6. *Potamogeton* sp. (ヒルムシロ科) 図10

ホソバミズヒキモ *P. octandrus* Poir. のようにも見える。

(注)

(1) 図9・10は、いずれも茎葉の状態から、ヒルムシロ属に最も類似の水草であると考えられるが、種名の判定にはなお熟慮の余地があると考えられる。

(2) ヒルムシロ属以外の水草化石と考えられるイネ科やミクリ科類似その他の化石が若干あったが、ここでは割愛する。

終わりに、本稿の作成にあたり、ホザキノフサモの化石標本を賜った篠原圭三郎・臼田浩一、校閲と文献を賜った棚井敏雅(元北大理学部地質学教授)および直接いろいろと指導ご協力頂いた尾上亨・加藤信夫氏らに対し、さらに化石の同定にご協力下さった角野康郎(神戸大教養部)先生に深甚の謝意を申しあげる。

## 引用文献

- (1) A. G. NATHORST : Zur Fossilen Flora Japans. Palaeon. Abhandl. Bd. IV. Heft 3, pp. 197~250, 1888.
- (2) 遠藤誠道: 新生代の化石植物 岩波書店 岩波講座(地質・古生物) 1931.
- (3) 三木茂: 遺体より見たる亜細亜水草 陸水学会誌 8(3~4) pp. 410~416, 1938.
- (4) Endo, S. : A Pleistocene flora Shiobara, Japan. Sci., Rept., Tohoku Imp. Univ., 2nd ser., Vol. 2., No.1, pp. 47~80, 1940.
- (5) 小泉源一: 塩原更新世植物象 植物分類及植物地理 Vol. IX. No. 1, pp. 1~27, 1940.
- (6) 棚井敏雅: 地質時代の植物界 3. 新植生代(被子植物時代) 新版古生物学 IV pp. 50~67 藤岡一男編 朝倉書店 1958.
- (7) 藤山家徳・浜田隆士・山際廷夫監修: 学生版日本古生物図鑑 北隆館 1982.
- (8) 加藤信夫: しおばらの化石(木の葉化石園発行パンフレット) 1986.

(1987年7月1日 記)

○『水生雑草と陸水環境管理システム』(ジャパンレイクアンドキャナル・リムロジー応用研究室発行、著作・編集 沖 陽子、昭和61年8月31日、A4版20頁)

我が国で水生雑草が問題とされるようになって久しいが、その取り組みにおいて、我が国は欧米よりかなり遅れている。アメリカなどでは水生雑草の管理にたずさわるスペシャリストが数多くいるのに対し、日本では、まだごくわずかである。水辺(ウォーターフロント)の大切さが叫ばれながら、水草とどうつき合ってゆくのかについては、その思想も具体的ノウハウも未熟な状態にある。

今後、この問題はますます大きくなってゆくと予想さ

れるが、ここに紹介する冊子は水生雑草にどう対応すべきか、その視点と基礎的知識を平易にまとめたものである。なぜ水生雑草問題が起こるのか、どのような種類の水生雑草があるのか、雑草の管理(利用も含む)にはどのような方法があるのかを紹介し、最後に、水生雑草の問題は根本的には陸水環境全体の問題と位置づけている。水生雑草問題をこれほど総合的に展望したものが、今まで我が国になかっただけに、各方面で役に立つものと思う。照会は、〒560 大阪府豊中市市山町23-15 ノックビル2Fの発行元へ。

(角野康郎)